

直方ミニバスケットボールクラブだより

子どもの育ちの循環を生む 地域に根ざした少年スポーツクラブ



交流によって育つ力

8月9日（日）には、久しぶりに他チームとの合同練習を行いました。コロナ禍ですので、環境、時間、活動内容・方法等に配慮しながらの活動でした。それでも、やはり時折、このような交流場面の必要性を実感しました。プレーの交流による学びはもちろんですが、プレー以外に大切にしなければならないことがあるということ、ともに直方市内で活動しているなかまとともに共有することに大きな意味があります。子どもたちの活動は、小学校で終わるわけではなく、中学校でいっしょになって活動する可能性もあります。同じ学校・チームではなくても、試合等で交流する機会もあるでしょう。高校でいっしょになることがあるかもしれません。同じ時代を生きる子どもたちが、何を大切に活動し、どんな進路選択をし、どんな生き方をしていくか、いい意味で大いに影響し合って成長していってくれることを期待しています。

地域に根ざした循環型のクラブを

翌8月10日（月）は、延び延びになっていた現中学1年生を送る会を「励ます会」として実施しました。卒部生には、ずっと申し訳ないと思っていましたので、ようやくこの節目の機会をもつことができたことに、ひとまず安堵しています。本当は、もっともっと手厚く会を催してあげたかったのですが、現状ではこれが精いっぱいでした。その分、これからのつきあいをずっと続けていければと思っています。

会の終わりのメッセージでもお話ししましたが、クラブのOBや保護者、ミニバスケットで縁していただいた関係者が、循環しながらクラブの活動を支えてくれています。地域に根づくスポーツクラブとして、人（子ども）とのつながりを大切に活動してきたことによるものと思っていますし、その軸をぶらすことなく活動していきたいと考えています。

中高生が時折寄って、小学生の相手をしてくれることはもちろん、コーチもOBが担ってくれています。現状、コーチは、単なる私の手伝いではなく、一コーチとして、直方クラブの理念、私の指導の裏側を理解して動いてくれています。ここが大きいです。課題がみえたとき、子どもへの対応をどうするかについて、自分一人の判断で動くのではなく、必ず私と、子どもの状態を共有したうえで、考え判断し行動してくれています。待つべきとき、進言すべきとき、見守り見届けるべきときなど、場面に応じて適宜対応してくれています。そうして、子どもの力を高めたり、私と子どもの間をつないでくれたり、とても重要な役割を果たしてくれています。単にバスケット技術を教えるだけのコーチではありません。子どもの教育の一端を担っているという自覚のもと、私たち指導する立場にある者も成長していかなければなりません

育てたい「気づく力」

6年生を育てることに力を注いでいます。その年の活動の質は6年生のリーダーシップにかかっています。6月終わりからスタートし、7月終わりにリーダーシップ体制を確認し、それから約1

か月が経過しようとしています。極力私から先に動くことをせず、6年生の動きを待つようにしていますが、私が期待している姿には、まだまだです。下級生への個別サポートはよく気にかけて取り組むことができますが、活動のための準備や全体を動かすことなどがうまくできていません。

その要因は、“気づく力”が足りていないためです。気づいていれば、当然動く子どもたちですが、動いていないのは「気づき」がないからです。「気づく力」をさらに言えば、「今日の活動はどんな活動かなあ」「この後、どんな活動になるかなあ」など、先を「見通す力」「想像する力」です。「それならあれを準備しておかな」「次はこのことを指示しておかな」ということになります。気づくための情報が何もない中で「気づけ」というのは無理がありますから、初めての状況になる場合は、活動の最初に必ず流れを説明します。また、その日の終わりに次の日のことを必ず説明します。しかし、それに見合う動きがとれていないということです。いざやろうとしたときに、あれがない、これがない、ということが起きてきます。

もう一つ、下級生にまちがった動きが出ていてもそのまま、ということがあります。6年生は、自分で活動しながら下級生の活動のようすにも気にかけていなければなりません。それが見れていないことがまだ多いです。これは、常々意識して見ようとしていなければ見れません。常に気にかけていなければ気づくことができません。

6年生としての自覚と責任感、主体的な動き、「自分（たち）で考え判断し行動する」ということを求めている具体が以上のようなことです。毎年の6年生が、最初に私から問われることです。こうして求めていることができるようになると、6年生に安心して活動をまかせられるようになります。クラブで言う「自立」した姿です。そのためには、クラブのときだけでなく、ふだんから、「気にかける」「先を見通す」「想像する」力をはたらかせることを習慣化していかなければなかなか育ちません。

大切にしたい「非認知能力」

社会が大きく変化し、教育が変化し、その中を生き抜いていくための力として、必ず必要な力です。ちょっと難しい教育用語になりますが、子どもの「学力」を言うとき、「認知能力」と「非認知能力」という言い方があります。「認知能力」は、簡単に言うと「知識」（測れる学力、いわゆる「点数学力」）です。「非認知能力」は、心の力とも言われる、意欲、協調性、粘り強さ、忍耐力、計画性、自制心、創造性、コミュニケーション能力といった力で、測定できない力です。子どもの先々の人生は紆余曲折です（私たちおとなもそうであったように）。何もなくすんなり育ったなんていうことは、まずないでしょう。つまづくこともあるでしょう。子どもへの教育が、「認知能力」にばかり偏り、「非認知能力」がおろそかにされていくと、子どもがつまずいたとき立ち上がることができなくなります。両者をバランスよく育んでいかなければなりません。

活動開始から3か月目に入る子どもたちが、どんな成長をとげていくか、また楽しみに指導していきます。